

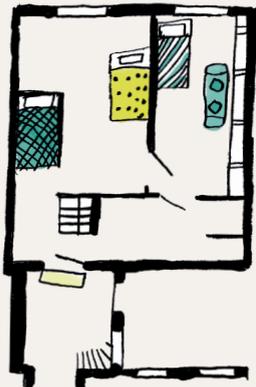
さいわいなことに、別館はいかにも隠れ家といった、薄暗い地下室や狭い屋根裏部屋ではありません。二つのフロアにある4つの部屋と屋根裏部屋が生活のスペースでした。

アンネはこの隠れ家をどう思っていたのでしょうか？ もちろん、けっして快適ではなかったはずで、毎日、家族とばかり一緒にいるのは苦痛です。けれど、いつもだれかがそばにいるのは安心でした。

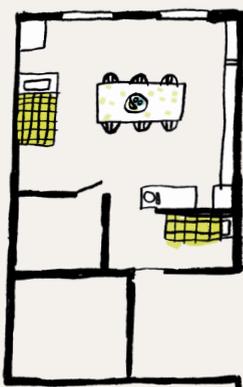
これって、  
知ってた？

フランク一家は自分たちの隠れ家をアハターハウス（「裏の家」という意味）と呼んでいました。

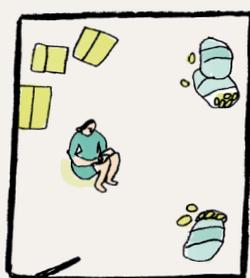
3階



4階



屋根裏部屋



アンネの寝室は隠れ家の3階でした。アンネは時々、屋根裏で日記を書き、窓から新鮮な空気を吸って、ひとり物思いにふけりました。

一週間後、隠れ家生活にあらたなメンバーが加わりました。オットーの共同経営者であるヘルマン・ファン・ペルス、その妻のグスティ、そして16歳の息子、ペーターです。ファン・ペルス一家（『アンネの日記』の中ではファン・ダーン一家という偽名で登場している）もユダヤ人で、迫害の危機にあるため、フランクは彼らを隠れ家に住まわせようと考えました。

ファン・ペルス家の到着で、家は少し窮屈になりました。フランク家は3階の2部屋で眠り、4階の居間は、夜はヘルマンとグスティの寝室になります。ペーターは小さな部屋をあてがわれました。

アンネはファン・ペルス家の3人を鋭い目で観察していました。ヘルマンは何事にも自分なりの意見をもっていて、ためらわずに

それを人に伝えます。グスティは夫と意見が違うこ



ペーター・ファン・ペルス